

## 時には森の中に入ってみよう

理事長 佐藤 洋平



**基**礎研究活動の世界における日本の位置を把握するために、論文の被引用数を用いた分析結果（政策研ニュースNo.223、pp.4-5）は、化学、材料科学および物理学では日本の論文の世界シェアが他の分野に比べて高いが、環境／生態学では論文産出量が少なく、世界上位30に入る研究機関も無いことを報告していた。環境／生態学（および地球科学を含む）の論文の世界シェアは5%強で、他の分野の中で最も低い。基礎生物学のそれが10%弱であることと比べてみたとき、その低さがどの程度のものであるかが分かる。

こうした環境学も生態学も、基礎科学分野において掘り進められる知（「知の深化」）を融合させる創造的な知的活動によって生み出される「総合知」である。深化する知を紡ぎ「総合知」を織り上げる行為においては、自分の世界と価値観に閉じこもり内向的になり排他的な思考形態をとっては、その実現は覚束ない。日本において「総合知」の性格を持つ科学論文の世界シェアが他の分野の中で最も低いのは、自己完結型の社会を志向するといわれる日本社会の特殊性に由来しているのであろうか。あるいは、日本人の環境の捉え方は、自然の理解同様、総体的であるといわれるように、環境研究における課題の探求方法も総体的で広くかつ深いので、西欧で発達した要素還元的探究方法に比べ、現象の解明は一入難しいことにそれは由来しているのであろうか。とまれ、この総体的

な探求方法と要素還元的な探求方法とが併合されるならば、環境学における新たな展開が期待できそうではある。

科学の進歩、発展を促す知的能力は洞察力と創造力であると言われている。どちらも新しいものを求めるという志向性をもっているということにおいて共通である。洞察力や創造力の必要性は、科学の世界に限ったことではなく、ビジネスにおいても然り、行政においても然り、いかなる世界においてもその必要性は高い。しかし、変化を恐れたり、居心地のよい現状に満足していたり、現状維持を求めるところに洞察力も創造力も育たない。

「カウンターウエイトを持って」と大学院時代に先輩からよく言われたものである。上皿天秤の片方の皿だけにものを載せると転倒してしまうが、もう一方の皿に分銅を載せるとそうはならない。分銅のようなものである。葦の髄から天井を覗くような専門バカに陥ることを戒めるものでもあるが、分銅の視点を併せ持つことの重要性を示唆するものでもある。

「知の創造」のように、新しいものを探求することにおいては、突き詰めることのみでなく、視点を変えることも必要である。時には踏みならされた道から離れ、寄り道をしてでも、森の中に入って試みる必要がある。アレキサンダー G. ベルの言うように「あなたがこれまで見たことがない何か新しいものをきつと見出す」に違いない。